

分科会「ろう女性の歴史」第二部

助言者：大矢 暹／司会：美多哲夫／記録：美多哲夫

広島体験者 池田美智子・住吉喜久子

司会／大矢先生の講演について、質問がある方はいらっしゃいますか

今井（滋賀）／講演していただいて、とても勉強になりました。京都のおばあさんが亡くなって、四日市の娘さん親子は今どう暮らしているのか。プライバシーの問題もあると思うがお聞きしたい。

大矢／京都のおばあさんが亡くなるまでに、娘さんはたびたび会いに行かれました。おばあさんが亡くなって後、おばあさんにお世話になった親しいみんなと相談しました。

おばあさんの生涯を記録に残そうと。私たち一人のおばあさんとの関わりを書き綴ることで、おばあさんが歩いてこられた道、戦ってこられた道を少しでも遺したいと考えました。幸い、娘さんも承諾して、あの再会の日からのことを寄せてくださいました。それに、おばあさんが生前に、みずからの生い立ちを記しておられることも分かりました。

深く信仰されていた教会の関係者に預けておられたのです。「みんなのぼっちゃん」というタイトルの小冊子が完成し、教会での「偲ぶ会」には娘さんもいらっしゃいました。私とは、それ以来、娘さんとはお付き合いがありません。小冊子は、残部が京都市聴覚障害者センターに保存されているかと思います。娘さんに会って話を聞きたい方は、連絡すれば会えるかもしれません。「みんなのぼっちゃん」の冊子は、京都バプテスト教会にも残っているかも。

ついでに資料の説明をします。今日、コピーで配布しました昭和9年の古い新聞を見て下さい。京都盲啞保護院に関する記事があります。また、「三好幸造」という人の名刺広告があります。日本ろうあ協会京都部会の会長もされたという、おばあさんが再婚された方です。孝造氏のお父さんは、ろうあ夫人の自立のためにと、「京都盲啞保護院」が消滅した後に、授産場を設置されたといっています。その写真も載っています。実態はろうあ婦人を雇用した仕事場のようです。息子さんの孝三氏も、そうした父の影響からか、「京都ろうあ自立会」をつくって、いろいろ方面、例えば東本願寺関係などからもカンパを集めて、ろうあ会館を創ろうと運動されたそうです。しかし、敗戦の色濃い時代の中で、募金も孝三氏も行方がわからなくなったとされています。京都に生まれ育った藤田孝子さんは、よくご存じだと思います。貴重な資料です。あとでゆっくり読んで下さい。きょうは三好のおばあさんばかりでなくて、広島の体験者に話を聞いて、勉強しましょう。

司会／大矢先生に質問は終わりにして、広島の体験者に質問がある方は。

笹（三重）／住吉さんの結婚前の名前は浜田さんで、池田さんの結婚前の名前は横山さんですね。わかりました。体験者に聞きたい。ミスコンで、今はろうのミスコンを断られる。なぜですか。ろうあ協会だけですか。聞こえる人といっしょのミスコンと思った。勘違いしてすみません。ろうのミスコンはどうやったのか。

住吉／きれいなプロポーションを争ったりするミスコンではなくて、昔は戦争が終わったあとの貧しく混乱があった時代で、いい催しとはいえなかったけど、しかたがなかった。広島県の各地から代表者が行って、京都で全国から集まった戦後初のろうあ者大会の中でのコンクールです。参加者の胸につけた番号に投票して一位・二位・三位を選んだのです。本当に下らないもので、恥ずかしくてよくなかった（笑）。

藤田（島根）／第1回ろうあ者大会のとき、戦争が終わったばかりでみんな混乱していた。若いきれいな女を集めて舞台に並べた。男は半分遊びでやった。おかしくて変な気持ちだった。私は参加しなかったが、あとで主人に聞いた。あれはまじめじゃない、半分遊びでやった。昔の男は

宴会で女をからかって遊ぶことが多い。ミスコンといってもそれと同じみたい。

住吉／今思い出しても変な気持ちで、本当はやりたくなかった。抵抗はありましたね。

笹（三重）／コピーの新聞記事にミスコンの写真がある。ミスコンに京都から出た河合さんが、結婚されて湯浅さん。湯浅さんが亡くなるもっともっと前、新聞に載った第1回ミスコンの写真を見せてもらった。湯浅さんに聞くと「恥ずかしいけど面白い、よかった」とっていた。どうして続かなかったのか。

藤田／女はやはりプライドがある。芸者の遊びと同じでマネしては困る、怒って反対の声があった。やっぱりまじめにやろうと、ミスコンをつぶしたと聞いた。

住吉／この大会のあとで、ミスコンは一度きりでなくなった。

藤田／あのときの女は、やっぱり自覚があった。広島土肥さんら女の活動が始まった。それまでは女の役員がなかった。土肥さんと北海道の鈴木さんの二人がよく活動した。鈴木さんはいま亡くなっている。

住吉／広島土肥さんはいま91歳で、入院している。

菅沢（茨城）／新聞にミスコンの写真があったあとで、男性から結婚してほしいと申し込みが殺到したか。申し込んだ人を選んで結婚したのかどうか聞きたい。

池田・住吉（苦笑い）

大矢／古い新聞のミスコン写真に、池田さんと住吉さん、京都の湯浅さんが写っている。湯浅さんは亡くなっているが、生前、全日本ろうあ連盟の婦人部長としても活躍された。昭和23年の京都での全国ろうあ者大会のミスコンは、今日の藤田さんの発言から、開催の実相がわかってきた。男たちの宴会の余興で女を集めてミスコンとは何かと広島土肥さんたちが主張し二回目の開催をつぶした。しかし、昭和24年の中国ブロック大会でミスコンをやっている。記事も残っている。そのとき三位に選ばれたのが池田さんです。いまご主人もご一緒に参加されています。土肥さんの活躍は、それ以降なのかな、池田さんにそのいきさつを話していただければ。

池田／昭和24年、二十歳のときに中国ブロック大会が岡山市で開かれ、ミスコンもあって、二位に住吉さん、三位は私でした。住吉さんは二度も二位です。一位は岡山の人で、現在も元気でいらっしゃいます。

大矢／全国大会での二度目はなくなった。しかし、中国ブロック大会でしぶとくミスコンをやったわけですね。おふたりは一度ならず二度も参加している。それについて、だれか強くすすめたのですか。

池田／忘れたけど、岡山市の会長が中国ブロック大会のとき、女性をたくさん集めて並べた。ミスコンの投票で一位・二位・三位を決めて、私が三位になった。そのことを少しおぼえている。

住吉／中国のことは本当に忘れた。全国大会のあとで中国ブロック大会に参加したと、今いわれると、ああそうだったのかと思い出した。

藤田／ふたりともご主人は有名な活動家です。岡山の人でも中国ブロックで有名な活動家で、また京都の湯浅さんも婦人部長の活動で有名です。男たちの遊び面白半分を選んだけれども、やっぱり女が伸びてくれてうれしいと思う。

住吉／昨年頃、後輩で年は60歳ぐらいのスマートな女性から、なぜミスコンがなくなったのかといわれてびっくりした。バレーの活動をよくして、ミスコンがあったら出たいと言っていた。

池田実／私は藤田さんが話された岸ではありません。池田の夫です。よろしく。

私が妻をナンパしたのでなく、正直にいうと逆ナンパされたのです（会場爆笑）。本当です。

住吉／3人とも同級の幼友達でつきあって、知り過ぎて当たり前です。

池田実／8歳のとき、学校でいちばんのチビだった。妻も同じチビ同士で、おててをつないで歩いていたのをおぼえている。

藤田／熱い、熱い（笑）。

池田実／ヘレンケラーが来たことを話してほしい。

池田／昭和12年、8歳のときに広島ろう学校に入学した。その1年目9歳のとき、寒い2月のころだったと思う。アメリカの盲ろう者のヘレンケラーが広島ろう学校に来た。私は生徒を代表して花束を贈った。ヘレンケラーは青い目で、目が見えるようで、目と口と耳の全てが不自由だった。口で会話できないので、付き添いの通訳者と手のなかで指文字で話していた。通訳者が日本の通訳者男女2人に伝えて、講演した。花束を贈ったとき、ヘレンケラーは目が見えなくてわからないので、私の頭から足まで手でさわって回った。私は全身ですごく感動した。

住吉／古いアルバムに、ヘレンケラーが広島ろう学校に来たときの写真がある。学校の講堂に生徒のみんなが集まった。これは昭和13年のときで、2回目の昭和25年は広島での講演会には、当日宮島での中国ブロック大会の散会后、参加した。山田さんから生徒を代表して花束を贈った。山田さんは現在東京に住んでいる。

大矢／この資料に、ヘレンケラーの来日記録がある。よく見て下さい。そのときの写真があるかどうかはわからない。質問します。池田さんは花束贈呈の役にどうして選ばれたのですか。きれいで可愛かったのでしょうか。先生のえこひいきですかね。

住吉／池田さんは顔が丸くて、お人形みたいに可愛かった。私は外れましたよ。

司会／ほかに質問がございませんか。女性の方お願いします。

笹（三重）／全国ろうあ婦人集会で、昔は列車に乗って子ども連れの参加は大変だったと思うがどうか。

住吉／主人が元気だったころは、第一回は京都で開かれ、広島で大会が開かれたのを最後に、主人が亡くなった。婦人部長の土肥さんに代わって、主人が県庁の交渉にたびたび出ていた。大会は11月2・3日で、藤田さんも参加していた。大会が終わったあとの11月30日の朝、県庁へ行く前に入浴できれいにしようとしたときに倒れた。私は聞こえなくて、気がつかなかった。風呂の湯気が出て長くて、ガラス戸越しに姿が見えないので、不思議に思って、戸を開けてみたら、主人が倒れていてびっくりした。たまたま隣のおばさんが来ていたので、救急車を呼んで病院に運んだ。医者先生から「1・2時間前に死んでいた、もっと早く発見して運ばばよかった」といわれた。

大矢／そのときお子さんはいませんでしたか。主人のことはおいといて、あなたは婦人部の活動に参加されたのはいつごろでしたか。

住吉／主人が亡くなってから、婦人部の活動に行きました。主人がいるときは、婦人部に行っていない。私は仕事で、島根ろう学校を卒業した二人に下宿で洋裁を教えていたので、婦人部に行けませんでした。

藤田／住吉（重治）さんと私の主人（威）は親交が深く活動は同じ。亡くなる前に、私の主人が9月30日に急に亡くなった。住吉さんがびっくりして、来てくれた。その時婦人集会の準備で忙しく、婦人部長の土肥さんは難聴ですが、やっぱり交渉は住吉さんが上手で、まかせて活動してくれた。2ヶ月後の同じ30日と同じ時間に住吉さんが亡くなり私は、びっくりして泣いた。お通夜に行っただけで、翌日の葬式に行けなかった。大阪のみんなから「藤田の奥さんが来ていない、冷たい」といわれて、本当につらい。いちばんつらいのは、お母さんから「あなたの主人が、息子連れて行った」といわれたことで、忘れられない。

あと藤田の教え子4人が行って、いろいろ仕事を教えてもらった。いろいろとで心配して、よくやっていると聞いて安心した。住吉さんは主人が亡くなってから、婦人部の活動に行っただが、私も同じで主人がいたら婦人部に行かない。私の主人は住吉さんと同じで、男は、女が外へ行くことが嫌いでした。女を家にとじこめて、男が活動していた。長く病気で寝ていればよかったが、

急に亡くなったので、頼る人がいなくて困った。経験でわかる。やっぱり女はがんばる必要がある。やっぱり聴者は冷たい。同情してくれるだけで、周りに情報がない。やっぱりろうの仲間と交流しながら情報を教えてもらうのがいい。住吉さんと話し合ったりして、だんだんとしっかりしてきたのがうれしい。

住吉／私の主人が亡くなってから、藤田さんが心配して相談に乗ってくれたおかげで、元気になったので、本当にありがたいと思っている。実をいうと、私の主人は藤田さんが亡くなってから、すごく気落ちしていた。でも婦人集会のためにがんばって、集会がすべて終わったあとで、ホッとして気が抜けて急に亡くなつたらしい。本当は入院したいくらい気分が悪かったが、病院の診察で「大丈夫、心配ない」といわれた。また一週間後に診てもらおうと思って亡くなった。大丈夫だといわれたので、自分の身体に注意していなかった。入浴で倒れて冷たくなっていた。医者からくわしい説明がなかったのが悪い、残念だったと思う。

今井（滋賀）／これに関して、病院で医者とコミュニケーションがうまくとれなかったのではないか。

住吉／私の主人は中学2年のときに病気で失聴した難聴で、ふつうの聴者と同じように言葉を話せる。言われたことは筆談したり、母親が付き添いで行って通訳した。

藤田／あの当時の頃をお覚えていて欲しい。昭和47年のときは、手話通訳がいなかった。だから昭和47年に亡くなった。私の主人も同じで、手話通訳がほしいと求めていたが、いなかった。大変困った。亡くなったあとで、みんなは手話通訳が必要だと目覚めた。昭和45年ごろから少しづつ運動を始めた。

住吉／私の主人は昭和47年に亡くなったが、その前の45・6年ごろから交渉で手話通訳を求めていたと思う。

仲川（広島）／その話を思い出して泣いた。住吉（重治）さんから、私が高校を卒業する前に、ろうあ連盟の専従手話通訳になってほしいと頼まれた。私が「給料はいくらですか」と聞いたら「給料はありません」といわれた。「交通費は払いますが、連盟は給料を払えません」といわれた。私は高校を卒業しても給料がないでは、通訳に行けないと断った。高校を卒業したのは昭和32年で、そのころから専従手話通訳の話をよく聞いた。けれども給料がないところへ仕事に行くのは難しい。断った経験があるけれども、住吉さんには可愛がってもらった。今思い出すと涙が出てきて、ごめんなさい。

住吉／仲川さんに断られてしかたがないので、ほかに広島大学の学生さんで、伊吹さん・河合さん・林さんの3人をお願いした。県庁に相談したら「広島大学に手話クラブがあるから、頼めばよい」といわれた。それで手話クラブに行き、つきあったのがきっかけになった。連盟は謝礼を払う金がないので、しかたなく主人が自腹で払っていた。主人が学生といっしょに交渉に行くたびに交通費と謝礼のかわりに飲食させていた。私は学生におごっていたらしいと思っていたが、あとで、伊吹さんから「元気でいたころは飲食をおごっていただいた、すみません」といわれた。今はろう学校の先生で、元気でいる。昔は通訳に払う謝礼がなかったので、しかたがなかったと思う。

司会／手話通訳制度がなかったときが、いちばん苦しい時代だったと思う。これを忘れないで次の世代に伝えていくことが、聾史学会の役割です。さて、次の質問は。

菅沢（茨城）／結婚してから、子どもとのコミュニケーションはどうしていたか。今は親子のコミュニケーションがよくできるが、昔は筆談とか口話とか、どんな方法だったのか話してほしい。私は夫と子どもがいる。息子と手話でコミュニケーションしている。子どもは12歳で、今少し悩みがある。今小学6年生に大きくなったが、反抗期が始まっているらしい。子どもは聞こえるし、実は旦那も聞こえる人です。家庭内はうまくいっていない状態で、我慢している。旦那とは見合

い結婚でなく、いとこ同士で結婚した。母はろう者同士の結婚に反対だったので、仕方ない。本当は好きなろう者がいた。いま聞こえる人と結婚して、聞こえる子どもが生まれた。考えてみるとやっぱりろう者どうしの結婚が一番いい。友達のろう者どうしが結婚して、手話で楽しそうにしているのを見ていると、うらやましく思う。母の考えでは、私が小学5年生のときに、父が病気で亡くなって、娘ひとりを育てたので、心配がよくわかる。本当は本人の意思で結婚すべきだが、母はろう者と結婚を認めない、聞こえる人と結婚すべきという考え方だった。

しかし、結婚してからしばらくして考えてみると、いま母は「間違っている」と詫びてきた。それはしかたないとして、聞こえる子どもは初め手話に抵抗感があった。母親の私がろう者だから、少しづつ手話でコミュニケーションするようになった。子どもが小さいときは、私がろうの友人達と手話で話しているときに、子どもが手話を不思議に思って、手を取って止めようとしていた。やっぱり聞こえる子どもよりも、もし娘がろうだったら楽で、手話がスムーズに行く。聞こえる子どもが大きくなると、コミュニケーションに限界がある。ふたりはどのように努力して育てたのか、聞きたい。

池田／私は昭和30年の26歳のときに結婚して、2年目に子どもが生まれた。その時いろいろ苦労して、聞こえないし、戦後で食料が不足していた時代で、苦しかった。主人の家族と同居して生まれたばかりの赤ん坊で、寝るとき泣き声が聞こえないので、父が二階から降りて起こしてしてくれて、乳を与えて育てた。1年ちょっと前ごろになると、子どもは活発に動く。私はつきっきりで世話して育てた。実は二人目できたが、主人の給料が安く生活が苦しいので、子どもはあきらめておろした。子どもが大きくなると賢い娘になったので惜しかった、二人目がいればよかったと残念だった。娘は広島大学に入学して、4年で卒業したときに好きな人がいた。両親がろうであることを理解してくれて、ときどき家へ遊びに来て世話した。大学を卒業してから相手の男性がひとつ年上で、仕事で姫路市に転勤してから毎日、長電話していた。娘が大学を卒業したあとは、広島ろう学校の先生になって勤めた。2年してからその人と結婚して、姫路市へ越した。孫がふたりで、旦那がまた転勤で、今神戸にいる。孫の上は京都大学で、下は高校2年です。

菅沢／夫婦ともろう者で、子どもの家庭がいい。私は主人と子どもが聞こえると、さみしく思っている。夫婦がろう者で子どもと楽しくコミュニケーションできるとうらやましく思う。

司会／（池田さんに）子どものコミュニケーションはどうしたのか、説明してほしい。

池田／子どもの口だけ見れば何となくわかる。手話は少しであんまりしていなかった。娘は卒業してから、広島ろう学校の先生になって3年間、そのときは幼稚部の担任で、手話はなくて口話だった。

大矢／私から（菅沢さんに）質問がある。主人は聞こえる人で、手話は全てだめというわけか。生まれた子どもがろうだったら幸せと決められるのかどうか。主人がいとこであっても手話を尊重してくれれば問題がないと思うがどうか。聞こえる人を排除する、ろうがいいと決めつけるのは疑問。主人が聞こえる人であっても、あなたの気持ちを尊重すれば問題ない。聞こえる人を排除する理由は何か。

菅沢／息子は聞こえる子どもで、母親のために手話でコミュニケーションできる。最初は手話を使わないつもりだった。私の母から「息子のために手話をおぼえたほうがいい」といわれたので、手話を教えた。でも、主人は抵抗感があったみたい。私の子どもだから関係ない。主人と年が離れすぎていると、考え方が合わないときがある。それぞれの家庭によってマチマチだと思うが、いま息子と手話ができる。（池田さんに）聞きたい。両親がろうで、聞こえる子どもと手話で、がんばって育てたのはすごい。私は手話が必要か必要ないか迷っている。私の母が「手話が必要」といわれたのは珍しい。私が小さいときは「手話はだめ、口話が必要」といわれたが、今は「手話が必要」と変わったので、不思議に思う。昔は口話、口話でしたね。

池田／今は手話が広がって良い。昔は手話はだめで、口話で話していたから、子どもの話がわかる。簡単に大きくなった。娘は頭がいいので反対に助けてもらっている。

菅沢／私は終わっていいですか。

大矢／あなたの主人は手話をおぼえてくれない？夫婦の会話は手話できない、口話で話しているのですか。

菅沢／手話ができれば問題がないが、本当は夫婦であんまり会話がな。兄と妹みたいに生活している。

大矢／わかりました。あなたの夫婦関係につっこむわけではないが、主人が聞こえるからだめというわけではなくて…。

菅沢／家庭で会話があっても、外出するときに主人は何も通訳してくれない。主人をおいて、市役所へ行って手話通訳を依頼した。手話はあまり上手でないが、通訳してもらっている。子どもの授業参観に初めて手話通訳をつけて行ったときは、子どもに反対されて、だまっていた。今では母親が聞こえないので、手話通訳が必要だということを先生もクラスの子どもたちもみんな知っている。通訳を反対されて泣いた昔とくらべて、今の社会は手話を見る目が変わってきている。

大矢／息子さんはろうのお母さんを全面的に受け入れている？お父さんが手話を学ばない、不思議に思う気持ちが育っている？

菅沢／息子は父親をうるさく思っている。母親の私になついてくれる。主人はきびしく育てる考え方だが、私は自由に育てている。悪いときがあれば、きびしく注意している。ろう夫婦の育て方と会話が楽しくて幸せな家庭を見て、どっちがいいのかわからない。

大矢／どっちがいいのか、みんなに聞いてみて。

菅沢／ろう夫婦の家庭は幸せですか。

会場／いや違う、関係ない、関係ない。

住吉／戦後、初めてろうあ協会に入ったとき、聞こえる女性と結婚している先輩の家庭が多かった。どうしてなのか聞くと、ろう者どうしの結婚は子どもを育てる大変な問題がある、聞こえる人が必要と親に強くすすめられて、しかたなく結婚した人が多い。子どもを生んで大きくなると、聞こえる母親と話してばかりで、ろうの父親はさみしく孤立してしまう。ろう者どうしの家庭は会話が楽しくていい。聞こえる母親と話してばかりしていた子どもが成人して、ろうの父親と会話ができないと感じたらしい。「いろいろ手話を教えてほしい」という人が出てきて、手話を教えた。手話の普及で社会が変わって、ろうの父親と手話で会話できて、喜んでいるらしい。昔は聞こえる人と結婚が多かったが、今はろう者どうしの結婚が多く、聞こえる人と結婚は数えるほどしかない。昔と逆転している。みんな楽しそうです。

大矢／昔のろう活動家で、聞こえる人と結婚した人が多かったですか。

住吉／聞こえる人と結婚した人が多く、ろう者どうしの結婚は数少なかった。ろう者は親の考えで差別されていた。

大矢／広島的女性から話してほしい。

住吉／広島にいる方は手をあげて、来て下さい。どうぞ。

山本三子（広島）／私は長野ろう学校出身です。広島のろうの主人に嫁いできた。私の父と母は聞こえる人で、兄弟は7人で私は末っ子。3歳のときに聞こえなくなった。ほかの兄弟はみんな聞こえる人で、ろうは私ひとりだけ。昭和30年生まれで、3歳のときにはしかと高熱にかかった。母は身体が弱いので、父といっしょに私を抱いて、松本市の病院をさがし回った。遠くて病院がないので、しかたなく長野市の病院を探した。それでも病院がない、注射を打たれて聞こえなくなった。両親の会話がわからなかったが、姉の口話と手話を少しでも見たらわかる。長野ろう学校幼稚部に入学した。4歳から高等部3年まで寄宿舎にいた。昔は盲とろうがいっしょの長野ろ

う学校だった。苦しかった。手話はいけないなどいろいろあった。姉が母と思い、祖母と思っていたのが違って、母だった。いちばん上の姉が末っ子の私をいつも連れて行った。兄弟は男・女・男・男・女・男・女で、私をいつも子守した姉を母と思っていた。祖母が実の母であることを知らなかった。わかったのは、中学1年のときだった。寄宿舎で生活して、夏休みのときはいつも姉が迎えにきて、家に連れて行った。兄弟にいじめられて、母(姉)がついているからいいと思ったが、違って面食らった。しかたがなかった。会話に苦労して姉と母と筆談をしていた。

手話は禁止されていたが、中学2年のときから先輩を見よう見まねで、メチャクチャに手話をおぼえた。でも母は手話を禁止したので苦しかった。正月と夏休みで家に帰るとき、父と母から口でいわれても、何もわからないままで、すぐ上の兄が教えてくれた。高等部を出てからは、親と離れて諏訪湖の会社に就職した。仕事で3年働いて、広島へ嫁いだ。広島ろう学校同窓会会長の山本が私の主人です。結婚して26年目です。子どもは3人いる。女・女・男です。いちばん上が26歳で、次が22歳、下は19歳です。いま生活は別で、2人の娘は結婚して2人の孫がいる。近くに住んでいる。下の息子は専門学校でマッサージ師の勉強中です。前に長女を産んだときは、病院は不便だった。手話通訳がいなくて、筆談ばかりで苦しかった。簡単に入院できなくて怖い。次女も同じで、はしかがひどくて、病院に通うのが大変で、タクシーに乗ったり筆談した。主人は仕事で休めないで、私だけ仕事の休みを許可してもらって病院で世話した。病院で寝るときは、子どもといっしょにベッドに入って、子どもが泣くたびに神経を使って起きていた。本当は、ヘビーシグナルを福祉からもらえるのですが、振動でびっくりして怖いので外してやめた。子どもの動きを感じて世話するので大変だと思った。下の息子は病気が大変で、2歳のときにひきつけを起こした。突然のショックで手話通訳がいなく電話もないので、タクシーに乗って、病院に運んで筆談した。私は子どもに何もしないでじっとしていたが、医者から「子どもを動かさなくてよかった」といわれた。もし動かしていたら、頭がポーとなるといわれた。そして大きくなって元気になって良かったと思った。

でも子どもたちと会話ができないときがあった。買い物に行くとき、夫婦で手話していると、子どもが手を振ってシッシッと止める。なぜと聞いたら、みんなが見ていて恥ずかしいという。しかたがないので、私はコソコソと手話した。小学校も同じで、いちばん上の娘が小学校のとき、私の手話を見て「お前のお母さんは聞こえない」といじめがあった。授業参観で夫婦で手話したら「お母さんは聞こえない」といじめられ笑われて、娘が苦しんでいた。中学3年もあった。あとで担任の先生に「お母さんが聞こえないから、いじめられてつらかった」と訴えると、先生がみんなによく説得してくれたおかげで、いじめがなくなってよかった。

先生が生徒に「将来結婚して、もし聞こえない子どもが産まれたら同じで、どうするのか」と聞いたら、生徒は「聞こえない子どもが産まれたら、大変だろう、本当に悪い」と思った。みんなと仲直りした。3人の子どもも同じで安心した。本当に3人の子どもは大変だと思った。夫婦が手話を教えなくても、子どもが手話を見て自然におぼえて、3人とも手話できるようになった。お客さんが来ると、いっしょに手話で教えてくれる。前は大変だったが、今はよかったと思っている。藤田／皆さんは若いから難しいかもしれないが、昔私の地元・島根県の山奥で農業している人がたくさんいる。ろう夫婦でろう学校を小学部3・4年で中退して、強制的に働かされた。年がくれてろう学校に入るのは無駄だと働かされた。友達はいない。みんな山々に散らばって、いなかで島根県は大きいので、年寄りの夫婦はほとんど学校に行かない。不思議に思って聞いてみたら、夫婦は同じろうでも会話が難しい。「ごはん、お風呂」だけで簡単。子どもがどうして産まれたのかというと、やはり親のいいなりで、女も黙々と働かされた。そのような人がたくさんおる。

協会に入って手話を始めた。男は同じろうの女と会話がほしい。自分でろう学校で手話を少し

知っている。女は手話がわからない。会話がない。やっぱり男はさみしい。周りは聞こえる人ばかりで会話がない。同じろうと会話がしたい。それで招いて、少しずつ手話を教えて、ようやく会話ができた。鳥根県でろう学校に行っていない夫婦は別として、ほかにお金持ちの男だけで、聞こえる女と結婚する人が多い。子どもの世話は聞こえる奥さんがする。

ふつうの畑と鶏の世話をする。ろうの女はほとんどろう学校に行っていない。あと旦那が亡くなって、女はどうするか、孫をおぶって世話する。年は80歳以上で、手話を少しおぼえている。息子を亡くし、母も亡くなったので、しかたがない。そのような人が他の県にいるのか、聞きたい。私はびっくりした、学校に行っていないで結婚する、だれが世話したのか聞いたら、周りがあの男と結婚したらいいと、その考え方がわからない。お金持ちでろうの男と結婚する聞こえる女が多いことは知っている。そうでないろう者が結婚するのは、つまり働くだけにとった、少し人権無視と同じだと思う。ほかの県に聞きたいと思う。

大矢／（ホワイトボードに「牛馬犬猫の代りに嫁取り 未就学のろう女」と書く）こういう人がいると、鳥根の藤田さんは強く告発されています。男も女も同じようです。

住吉／戦争前のときは、小学部3・4年で中退して、農業につく人が多かった。私の3年後輩で小学部4・5年で中退して農業をしたあとで、広島県ろうあ連盟の会長になった天野さんです。中退したけれど、一生懸命に読み書きに努力した。奥さんもろう者です。連盟の集まりに参加してみたら、中退した人が会長になっていて、びっくりした。よく勉強して頭がよかった。

司会／話が盛り上がってきたが、時間があと15分になった。足りないと思うが、ここでまとめとして大矢先生に10分間話してほしい。

大矢／私がろうになったのは小学校3年で、手話を学んだのは15歳。聾学校高等部の1年になってからです。ろう者たちとつきあってから45年間のなかで、京都の湯浅（河合）さんを除いてミスろうあの人たちに直接に、当時の話が聞けたのは初めてです。ミスろうあのおいといて、参加された皆さんも、幸せだったこと苦しかったことももっとくわしく話を聞かせていただきたいと思ったけれども、今日は午前中でプログラムが終わり時間が足りなかったことを残念に思っている。

住吉（重治）さんは、広島にろうあ老人ホームを日本で初めてつくった、その運動の中心。生前は家に泊めていただいたりお世話になりましたが、よく激論をかわされていたその住吉さんがミスろうあと結婚されていたとは夢にも思わなかったです(笑)。住吉さんは一言もおっしゃっていなかったから。住吉さんが亡くなったとき、病気で活動中に何度も入院したいといいながらも休養できずに、過労で亡くなったことを今初めて聞きました。そんな住吉さんついて妻はどうみていたのか、もっと伺えたらいいです。ところで住吉さんはどうして子供さんを？。なかなか出来ないとか、親が認めなかったとか、理由はいろいろあったと思う。女性としてうれしいこと、悲しいことがたくさんあったと思う。また別の機会に教えて下さい。

住吉／（子どもについて）それは違うんです。

藤田／本当はそのことを聞くのは、いちばん失礼だと思う。女性を傷つけることと同じでやめてほしいと思う。

大矢／そのことを自由に話し合えるようになれないかと…。言いたくないことは言いたくないで終わってもいいが、それは、本人が話すこと。話してもらえる機会があったらいいなといっている。藤本敏文は「女性の幸せとは、結婚して子どもを産むこと、乳を飲ませて母になること」と書いています。これが必ずしも女性の幸せになるかどうかは、価値観の拡がりと同じだと私は思っているわけではない。けれども、産みたいのに親が認めない、本当は産みたいけれども経済的理由で産めない。いま池田さんが話してくれたように、2人目がほしかったけど難しかったと。昔、日本の軍隊で女性を強制連行して慰安婦にさせられた。韓国で話せないまま沈黙していた人

がいま決心して話を始めた。自分は苦しかったけれども、それをみんなに知ってほしい、同じ歴史を繰り返さないでほしいとっている。いまイラクの戦争で女子に暴行して、また同じ歴史が繰り返されている。女性の人権が抑圧されている例がたくさんある。それを本人が話せない場合は、また同じ悲劇が繰り返されて起きている。若い皆さんが学ぶ必要がある。男と女と一緒に家庭を尊重する、人格を尊重する。プライバシーを守る上で、話を聞く。面白半分でなく真剣に、本当の人間の悲しみ・喜び・幸せを、目標をはっきりさせて話し合うことが大切と思っています。藤田／年を取った人はやはり人によっていろいろで、遠慮して男と女に対しては聞かない、本人が話すまで黙っている。夫が病気だから子どもが産めないときもある。妻は夫の気持ちを尊重して黙っている。夫がいわない間は、みんなどうしてなのか聞きたがる。聞きたがるのは、たいいてい男のほうです。

大矢／私から言わせようといっているわけではない、本人が話せるようになったらいいなとっているのです。藤田さんの意見に関してですが、ここはろう者の女性の歴史を学ぶ場です。男性ろう者の歴史研究の場もつくって、女性も出てきてもらって研究論議をやるといいのでしょうか。

いまは年齢差を超えて、お二人と藤田さんからたくさん話を聞かせていただいたと思う。全国レベルだけでなく、もっと地域で同じ場所で若い人たちが学べたらいいと思う。本当に感謝しています。私もできるだけ資料を集めて、勉強し、研究討論のきっかけになればと思っています。手元の資料は雑誌「ろうあ界」。いまのMIMIの前身でもあります。「ろうあ界」は、終戦近くまで発行されました。戦前の日本ろうあ協会の機関誌でした。

戦後、昭和の30年代に復活しますが、すぐ廃刊。あと雑誌『ろうあ運動』に引き継がれました。戦前・戦中のろうのリーダーがどう動き、どう考えたか、ろう団体の支援者がどんな役割を果たしたかも推測できます。書けるろう者がたくさん書いています。聞いて教えてもらいたいと思っても、みんな亡くなっている。こういう場所をがんばって続けて下さい。

(ふたりに) ありがとう、写真は素晴らしい、広島に頼んで、池田さん夫婦と住吉さん夫婦の記録を書いて本を作って出して下さい。本当の理由が言えないままに亡くなって、どうしようもなくなるよりも本に書いて下さい。みんなに見せて下さい。私のお願いです。本を持って行って、天国で主人に会って報告して下さい(笑)。

池田・住吉／本当にありがとうございました。(会場拍手)